

「循環産業の新たな局面へ！連携と協働から考える次の一手」シンポジウム/ワークショップを開催しました。

世界的な資源制約や市場変動リスクのなかで、個別の企業においても廃棄物を貴重な資源として捉え、質の高い循環利用（循環の高付加価値化）を行う事の重要性が高まっています。



質の高い循環利用を目指すためのアプローチとして、排出事業者と優良産廃処理業者等が互いのビジネスに対する理解を深め、パートナーとしてより踏み込んだ形で連携・協働を進めていくことを目的としたシンポジウム/ワークショップ「循環産業の新たな局面へ！連携と協働から考える次の一手」を、去る2014年2月5日（水・東京）、2月14日（金・大阪）に開催しました。

本シンポジウム/ワークショップに参加したのは、資源循環に関心の高い排出事業者と優良認定を受けた産廃処理業者、及び認定取得を検討している処理業者の担当者計90名。目指すべき「循環の高付加価値化」とはどのようなものか、排出事業者と処理業者とが課題解決のためにどのように連携・協働していけばよいのかについて、講演や優良事例の紹介、参加者全員によるワークショップを通じて考えました。

冒頭、環境省 産業廃棄物課 外山洋一課長補佐による挨拶と趣旨説明に続き、第1部として鳥取環境大学特任教授・サステナビリティ研究所所長の田中 勝氏により「目指すべき循環産業の高付加価値化」というテーマで基調講演を行っていただきました。

冒頭、環境省 産業廃棄物課 外山洋一課長補佐による挨拶と趣旨説明に続き、第1部として鳥取環境大学特任教授・サステナビリティ研究所所長の田中 勝氏により「目指すべき循環産業の高付加価値化」というテーマで基調講演を行っていただきました。



第1部 基調講演

「目指すべき循環産業の高付加価値化」

鳥取環境大学特任教授・サステナビリティ研究所所長 田中 勝氏

地球には限られた資源しかない中、人類と地球環境にとって最も望ましい社会は循環型社会であり、天然資源の消費を抑える社会への転換が必要です。その中で、依然として大量の廃棄物が発生すること、3Rの取組みが不十分であること、不法投棄がなくなること、処理施設の設置が困難であることなどが、日本の廃棄物処理の問題となっています。これまでも処理業者で



は様々な課題に取り組んできましたが、処理業者だけの解決は非常に難しい。処理業者だけではなく、排出事業者から消費者までが連携して、生産から消費・処理までを見据えたトータルでの最適化に取り組んでいく必要があります。また、処理業者は「処理」という事業領域や国内展開に捉われない意識の改革も必要です。日本は循環産業について先進的技術を有しており、アジアをはじめ世界にも積極的に展開していった欲しいと思います。

第2部 優良事例プレゼンテーション

(東京会場/大阪会場)

◆株式会社 LIXIL プロダクツカンパニー 安全・環境統括部 環境推進部 部長 横手睦彦氏

「LIXILの資源循環の高付加価値化と優良産廃業者との連携について」

LIXILは、住いの新築・リフォームから建材や住宅設備機器まで、住環境に関わる製品の製造販売を行っております。そのなかで、グループの環境方針・環境ビジョンを設定し、人びとの暮らしが地球と調和することを願い、住まいづくりのあらゆるプロセスにおいて、環境に配慮した取り組みを続けています。



現在、国内の産業廃棄物の約20%が建設系廃棄物であり、不法投棄される廃棄物の約75%を占めています。住宅関連製品を製造販売するメーカーとして、製品を売りっぱなしにするだけでなく、使用済み製品も責任を持って適正に処理することが使命であると考え、当社ではエコセンター（産業廃棄物中間処理施設）を全国3拠点で立ち上げました。中間処理業者として、リフォームにより発生する廃棄物をより再資源化しやすく処理するために、徹底的に職人の手作業により分別・分解しています。さらにエコセンターでは開発部門と連携して、製品開発の段階からリサイクル視点を導入し、将来発生する廃棄物の減量化を図るとともに再資源化がしやすい製品づくりを行っています。

また、中間処理した廃棄物の処理を委託する排出事業者の立場としては、優れた技術や仕組みを

持つ優良産廃処理業者の皆様との連携を深め、資源循環の底上げを目指していきたいと考えています。

(東京会場)

◆環境開発工業株式会社 業務部 渡辺隆志氏

「排出事業者と連携した『ワンストップサービス』について」

環境開発工業は、産業廃棄物の収集・運搬、処分、及び再生油の製造販売を主な業務としています。当社では、顧客との連携・協働による循環の高付加価値化の取り組みとして、複数の処理先を持っている排出事業者様に対し、処理を一本化する事による環境リスク低減及び資源の有効利用促進のための提案を行っています。さらに請求書、排出量データ、リサイクル率まで、環



境業務に関する様々な情報のとりまとめと提供を行うワンストップサービスを提供しています。このように徹底してお客様の要望にお応えすることが、お客様のコストや手間を削減すると同時に、安心・安全やコンプライアンスレベルの向上に寄与するものと考えています。これらに加えて、微生物等の働きを利用するバイオレメディエーションによる土壌浄化や障害者雇用の促進など、領域を超えて価値を創出すべく様々な取り組みを展開しています。

(大阪会場)

◆帝人株式会社 高機能繊維・複合材料事業グループ 経営戦略・企画管理室 大野未央良氏

「持続可能社会の実現に向けた帝人の循環型繊維リサイクルシステム『エコサークル®』」

帝人株式会社は、ポリエステル繊維事業をはじめ幅広い事業をグローバルに展開する企業グループです。当社では様々な環境への取り組みを展開していますが、その根底には、マイナス（環境負荷）からゼロにするだけでなくプラスへの転換を目指すこと、そして、様々なステークホルダーとの有機的な連携により社会の持続性を一緒に確保していく取組みを進めていく、と



いった目的認識があります。このような目標に対する取り組みのひとつとして、当社独自の循環型リサイクルシステム「エコサークル®」があります。これはユーザー（もしくは「顧客」）から回収したポリエステル繊維製品を化学的に分解・原料にまで戻し、再度石油由来同等の繊維を

製造するケミカルリサイクル技術により安定した品質で何度も繰り返し製品を作ることができます。当社では、商品開発から回収・再利用に至るこの仕組みを、環境意識の高い様々な企業・自治体などとの協働により構築してきました。今後も、持続可能社会の実現に向け、取り組みに共感いただける多くの皆様との連携を推進していきたいと考えます。

第3部 ワークショップ

第3部のワークショップ「Make the Loop!!」では、排出事業者・処理業者がほぼ同数ずつで構成されたグループに分かれ、各グループで選んだテーマについて各社の抱える課題の共有を行ったうえで、解決のアイデアやそれぞれの立場からどのような働きかけができるかについてディスカッション・発表を行いました。



例えばあるグループでは「意味あるリサイクルとコストダウンを進めるには」というテーマのもと話し合いが進められ、「排出事業者側では unnecessary レベルの分別をしていることもある」「単品のコスト削減からもっと全体最適の提案をすべき」「中長期的なパートナーとして互いの環境ビジョンを共有したらどうか」などの意見・アイデアが出されました。



このように多くのグループでは、コストという制約があるなかでどのように価値観を共有し、手を取り合って課題を解決していくことができるかという課題に対して、情報発信のあり方やスムーズな情報交換の仕組みなどについてそれぞれの立場から活発なディスカッションが行われました。

各グループの発表を受け、田中教授からは「排出事業者と処理業者が一体となって、循環型社会を作ろうという流れの議論は非常によかった。」とのコメントをいただいた一方で「そもそもどこまでコストをかけてリサイクルを推進すべきなのか？」という根本的な問い掛



けもなされました。

終了後、参加者からは排出側・処理側双方の事情や課題に対する理解が深まったとの感想と併せ、今後も取り組みを継続して欲しいとの要望が多く寄せられました。環境省では、今回の結果を踏まえ、行政・排出事業者・処理業者の連携を深めるための取り組みをより一層推進して参ります。



